検証

デイで介護度改善

埼玉モデル事業の現場を行く

埼玉県は昨年度から、要介護度の改善率が高い通所介護事業所に奨励金を出すモデル事業を4市町で実施している。認定の更新を受けた人のうち改善した人を割り出す単純な仕組みだ。供給過剰気味なデイに利用者にとって新たな選択基準を示すのがねらい。前半7カ月間の中間結果で改善率が最も高かった2つの事業所を取材した。

デイサービスセンター彩優加須

生活行為に勝るリハなし

「要介護度の改善率よりも、自分たちのやっている介護の中身に関心を持ってくれる人が増えました。それが何より嬉しいですね」

そう話すのは加須市でモデル事業1位を獲得したデイサービスセンター彩優加須を運営するアタッシェの事業統括部長・長島好美さんだ。彩優加須は開設時は地域密着型だったが、昨年7月、定員を19人に増やして現在の場所で再スタート。埼玉方式では認構が小さいと一人の改善でも割合が高く計算されるが、数字のマジックだけではない。

「特別なものが何もないこと」が同社が最も大切にしているポリシーであり、利用者にとって効果的なリハビリとなっていた。

スタッフのみなさんと

必需品だった杖が不用になった（左）。仲良く洗濯物干し。一連の動作がリハビリに

昔ながらの大きな民家は、お風呂やトイレ、スプリンクラーなどで改修を施したものの、バリアフリー仕様などには一切していない。あちらこちらに段差があるし、家具もたくさん置いてある。その一方で立ち棒やトレーニングマシンなどのリハビリ機器は見当たらず、唯一それらしきものと言えば足でこぐタイプの車いす「コギー」があることくらいだ。

お邪魔したのはちょうどお昼。一緒を食べ終わってひと息ついた昼下がり。自所では職員と数人の利用者が後片付け中だ。段差につまづかないよう、物にぶつからないように気をつけながら食器を運び、棚にしまっている。ベランダでは、女性の利用者2人が並んで仲良く洗濯物を干していた。かがんでカゴから洗ったタオルを取り出し、しわをはんぱんと伸ばしてちょっと背伸びをしながら物干し竿にひっかける。

「ここに来るようになってから、自然と注意力と足の筋力がついたのよ」と笑いながら話してくれた。御年90歳というが、しっかりとバランスよく立って安定感がある。以前は杖歩行だったことも、信じられないくらいだ。

「転んだら危険だから、と家族に言われて動くことが少なくなっていた人も、ここで過ごすことで自然に体力が増し、活発になっていきます。生活そのものが何よりのリハビリになっているのです」（営業企画課長の武石崇仁さん）

彩優にはPTやOTなどリハビリの専門職はいない。だが、自宅と同じような環境の中で、1人ひとりの利用者がどんな生活行為ができて、できないのかを常に見ていて、全スタッフで確認し合い、どうしたらできるようになるかを考える。

そしてもう1つ大事にしていることは、本人のやりたいこと、諦めていたことを見つけること。

「もう一度畑で野菜を作って収穫してみたい」「昔は散歩するのが趣味だった」。しっかりと利用者を見て話を聞く。すると、ちょっとした言葉や仕草の中からも、その人の興味関心があることが見えてくる。それを目標にして少しずつ達成できるように生活行為に働きかけるようにするのだという。「目標がなければ何をしても苦しいだけのリハビリになってしまいます。本人にとって意味あることを見つけて生きる力を養うことが私たちの役割だと思っています」（武島さん、武石さん）

杖が必要なくなったり、車いすから自立歩行になるなどして要介護度改善率4割を達成したのは、そうした日々の寄り添うケアの結果だと話している。